

目次

國民抗戰必携



昭和二十年四月二十五日
大本營陸軍部

増刷許可ス、但シ此ノ場合
ト〇〇複寫ト記スルヲ要ス

第一章 沖縄戦への道

1 沖縄の近代——同化・差別と反発

琉球王国から沖縄県へ

同化と差別・貧困への反発

2 中国やアジア太平洋への侵略戦争と沖縄

中国での沖縄出身兵士たちの体験

沖縄の外に送られた労働力と「南進論」

3 なぜ沖縄が戦場になったのか

沖縄への日本軍の配備と飛行場建設

地上戦闘部隊の増強

本土防衛の捨て石としての沖縄

米軍はなぜ沖縄をねらったのか

第二章 戦争・戦場に動員されていく人々

1 沖繩の戦時体制

社会運動や思想の弾圧

行政・教育による戦時体制づくり

天皇・国家に命を捧げる国民づくり——皇民化政策

人々を動員していく地域社会

戦争を煽るマスメディア

徴兵を忌避する人たち

2 戦場動員態勢へ

軍のために動員される人々

徴用

食糧など物資の供出

日本軍将兵の横暴・非行

軍と県に対立

3 疎開——根こそぎ動員と表裏一体の政策

役に立たない者を疎開させる

県外疎開——一般疎開と学童疎開

県内疎開

宮古・八重山の疎開

4 軍と県による戦場動員

軍県一体で進められた「県民総武装」

軍人として召集された中学生——鉄血勤皇隊

一般住民を戦闘員に——義勇隊

第三章 沖繩戦の展開と地域・島々の特徴

1 米軍最初の上陸地——慶良間列島

2 米軍の沖繩本島上陸 一九四五年四月

沖繩本島上陸

大本營と天皇の戦争指導

3 沖繩本島中部の激戦 一九四五年四月―五月

運命を分けた地域

斬り込みに駆り出される兵士たち

天皇・政府から見放された沖繩

時間稼ぎの南部撤退

住民スパイ視を煽った日本軍

4 沖繩本島北部の戦闘

広大な北部に配備されたわずかな国頭支隊

ゲリラ戦部隊の遊撃隊

軍官民一体のスパイ組織・住民監視

日本軍による住民虐殺

ハンセン病者の犠牲

米軍による住民虐殺

5 沖繩戦の終焉——本島南部 一九四五年六月

多くの民間人を道連れにした海軍部隊

組織的戦闘の終焉

6 飢えとマラリアの宮古・八重山

宮古諸島

八重山諸島

戦犯裁判

7 離島の沖繩戦

沖繩本島周辺の島々

久米島・粟国島・渡名喜島

伊平屋島・伊是名島

大東諸島

奄美群島・トカラ列島

8 米軍の戦闘方法、心理戦、軍政と収容所

十・十空襲と米軍の攻撃方法

心理戦

軍政と収容所

「戦後」の出発

捕虜収容所

9 沖縄からの九州奄美への爆撃

第四章 戦場のなかの人々

1 日本兵たち

変化する日本軍

捕虜になることを許さない日本軍

人々の良心良識を抑圧する軍組織

2 日本軍による住民に対する残虐行為

日本軍による住民虐殺

日本軍によって死に追いやられた人々
スパイ視された障がい者たち

3 戦場に駆り出された人々

戦場動員された義勇隊員

本土決戦の先取りとしての沖繩戦

海の墓場に駆り出された漁船と漁民たち

4 「集団自決」

慶良間列島

沖繩本島中部

伊江島

沖繩以外

起きなかつた地域・島々

なぜ「集団自決」が起きたのか

5 学徒隊

男子学徒隊

女子学徒隊

6 死を拒否した人々

生きることを選んだ民間人

投降を促した人たち

助かった人たち

7 防衛隊員

主力温存のための捨て石部隊

生きようとした防衛隊員

なぜ防衛隊員たちは「玉砕」を拒否したのか

沖繩出身兵たち

8 朝鮮人

軍夫

朝鮮人兵士たち

船舶の乗組員など

9 日本軍「慰安婦」と性暴力

日本軍「慰安婦」

日本軍「慰安婦」にされた朝鮮人女性

米軍の性暴力

10 沖縄の外での戦争に参加した沖縄の人々

無謀な作戦の犠牲になった兵士たち——中国・大陸打通作戦

戦後も帰らなかった兵士たち

戦犯になった沖縄の人たち

11 移民した人たちの戦争

中国・「満州」

東南アジア

南洋諸島

南米

12 米軍兵士にとっての沖縄戦

戦争神経症の多く出た米軍兵士たち

沖縄にやってきた米軍部隊の戦歴

第五章 沖縄戦の帰結とその後も続く軍事支配

1 どれほどの人たちが亡くなったのか

戦没者数の推計

南部撤退・戦闘の長期化と北部疎開が増大させた犠牲

沖縄の外での戦没者

2 どうすれば犠牲をなくせたのか、減らせたのか

民間人を守る方法はなかったのか

沖縄戦は避けられなかったのか

3 加害と侵略の出撃基地——米軍基地

加害の出撃基地

沖縄／日本に集中する米軍基地

4 沖繩戦の戦後処理

遺骨収集と追悼

援護法の適用と歪められた沖繩戦像

不発弾

5 沖繩戦の認識・体験談・研究

沖繩戦叙述・研究の歩み

自衛隊の沖繩戦認識

おわりに

あとがき

参考文献

332

330

323

序 なぜ今、沖繩戦か

近代の日本は戦争に次ぐ戦争の時代だったが、その最終盤に大きな地上戦としておこなわれたのが沖繩戦だった。一九四五年三月末から沖繩に米軍が上陸し、三か月にわたって住民を巻き込んで激しい地上戦がおこなわれた。当時の沖繩県の人口は約六〇万人、約八万人は県外に疎開していたと見られるので約五〇万人が巻き込まれた。日本全体（朝鮮、台湾、樺太を除く）では人口は七〇〇〇万人あまりだったが、もし戦争が長引いていけば、その日本本土でも同じような地上戦がおこなわれていたかもしれない。そういうことを考えると、沖繩戦はけっして沖繩だけの問題ではない。

今日、日本が戦場になることを想定した準備が次々になされている。ミサイル・アラートによる避難、攻撃されても司令部機能は生き残ることができるようにする自衛隊基地の強靱化きょうじん、対策、南西諸島への自衛隊配備と住民の避難計画、それらを進めるための軍事予算の倍増など、沖繩が真っ先に戦場にされるだけでなく、日本全体の戦場化が想定された施策が次々に実施されてきている。

狭い地域に多くの住民が住んでいる日本が戦場になるとどうなるのか。そのことを考えるための多くの手がかりを沖繩戦の経験からくみ取ることができるだろう。

沖繩戦における沖繩県民の死者は軍人軍属、民間人を合わせて一二万人以上、一五万人に及ぶのではないかと推定されている。この数字は沖繩に残っていた人たちの三分の一に近い。本土出身の軍人らや米軍人らを合わせると二〇万人を超えるが、民間人が軍人の死者を上回っていることは間違いない。戦闘行為による戦死者だけでなく、餓死やマラリア死なども多い。軍人の死者はかなり正確にわかるが、沖繩の民間人については正確な数字がわからない。これは民間人の死者には日本政府が注意を払わず、まったく調査をおこなっていないことに大きな要因がある。

亡くなった人だけでなく、生き残ったとしても深刻なケガを負った人、障がいを負った人、飢えやマラリアに苦しめられた人、家を失った人、郷里に戻れなくなった人、家族を失った人、孤児となった人、心の傷を負ってその後も長年苦しみ続けた人などその傷は長く続いている。

これほどまでに膨大な被害を出した戦いを二度と繰り返さないために、その後の日本は何をしてきたのだろうか。戦争も軍備も放棄する平和憲法を制定したことはそのひとつかもしれないが、日本政府は沖繩を切り離して米軍の軍事支配に提供したし、一九七二年に日本に返還されてからも、今なお日本全土の米軍専用基地の七〇パーセントを国土面積の〇・六パーセント

図 南西諸島



石原昌家『証言・沖縄戦』青木書店より。一部補足し作成

しかない沖縄に押し付け続けている。
沖縄戦における重要な出来事のひとつは、日本軍が多くの沖縄県民を殺害したことだが、歴史教科書にこの事実を書くとした時、文部省（現在の文部科学省）は教科書検定で削除させたことがあった。これに対して沖縄県民総ぐるみの抗議によって取り消させて、その後はその事実を教科書で書くことが認められるようになったが、後に日本軍が「集団自決」を強制したという記述は削除させ、今日にいたるまで認めていない。こうし

たことは沖縄戦の重要な事実を否定することだが、なぜ日本政府はそこまで沖縄戦の教科書記述にこだわるのだろうか。

自衛隊が、旧日本軍が住民を犠牲にした事実を認め反省し、自衛隊は旧日本軍とは違う、国民の生命と安全を何よりも第一に考える組織だというのであればいいのだが、そうした旧日本軍の負の事実からは目を背け、沖縄で「日本軍が長期にわたり善戦敢闘」したと幹部候補たちへの教育において賛美し続けていることも再三指摘されている（「沖縄タイムス」二〇二四年六月六日、第五章―5も参照）。

現在にいたるまで、日本政府も自衛隊も旧日本軍を称え、住民を犠牲にしたことを隠し続けているのはなぜだろうか。

人が歴史を振り返る時、それはただ過ぎ去った過去を見るためではなく、今の自分、さらに自分を取り巻く社会の現状を見つめ、どのような未来をつくっていくかとするのか、を考えるためである。だからある歴史の事実を否定しようとするのは、それが今の、さらに未来に向けてつくりたいものにとって都合の悪いものだからである。

沖縄の人々を本土防衛の捨て石（捨て駒）、つまり本土のための犠牲にしたのが沖縄戦だったが、そのことを認めず、そうした犠牲を繰り返さないような施策を抜きにしたまま、南西諸島の軍事化、戦争の準備が進められている。

そうしたことは沖縄だけのことではない。現在、日本全国では約三〇〇地区の自衛隊基地などの「強靱化」計画が進められようとしていることをどれほど多くの人が知っているだろうか。化学・生物・核兵器などによる攻撃にも耐えられるように司令部の地下化などが計画されている。筆者の住む東京郊外の町の自衛隊基地でも同様の計画があるが、地上の基地施設が破壊されて司令部だけが地下にもぐって生き延びるような状況になった場合、その周辺に住んでいる人々はいったいどうなっているのだろうか。日本軍だけが地下の壕（ガマ）に潜んで生き延び、住民は壕から追い出されて砲爆撃にさらされた沖縄戦の状況と重なって見えてしまうのは考えすぎだろうか。

さらに米軍基地や自衛隊基地のみならず、日本全国各地の空港や港湾などの民間施設までも軍事利用が進められていることを考えると、沖縄だけの問題ではなく日本に住むすべての人々にも関わる問題なのである。

いずれにせよ今日の日本に住む私たちにとって、人々の生命と安全を守るうえで、沖縄戦から何をくみ取り、現在、そして未来に生かしていくのか。その課題を今こそ考えなければならぬ。そのような切迫した状況が広がっているように思われる。沖縄戦から八〇年、今につながる問題として沖縄戦とは何だったのかを一緒に振り返って考えてみたい。

なお本書では、歴史的な事実の叙述だけでなく、普通の人々の視点から沖縄戦の実相に迫る

ために多くの体験者の証言を引用紹介した。そのために新書としては分厚いものになったが、自分がそこに巻き込まれていたらどうだったのだろうか、と想像しながら読んでいただければ幸いである。

凡例

参照した文献については、文献を特定できる最低限の情報のみを記すのでくわしくは巻末の参考文献リストをご覧いただきたい。沖縄県史の場合は、「県史6・二三五頁」、市町村史の場合は、「糸満7上・五八頁」「那覇3―7・二二五頁」のように市町村名と巻、引用参照頁を記す。一般の文献は、著者名、書名、引用参照頁（野里洋『汚名』三五頁）、論文は、著者名、論文名（林博史「沖縄戦における脱走兵について」を記す）。

史料については、最低限の情報のみ記載するか、くわしい情報が記載された参考文献を挙げておいたので、それを参照していただきたい。「沖縄143」とあるのは防衛省防衛研究所戦史研究センターの請求番号である（正確には「沖台 沖縄143」）。RGから始まる番号は米国立公文書館の請求番号である。引用にあたっては、カタカナはひらがなに、旧漢字は新漢字に、また読みやすいように適宜新かなづかに直した。

沖縄戦についての基本的な文献である、『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』、吉浜忍・林博史・吉川由紀編『沖縄戦を知る事典』、古賀徳子・吉川由紀・川満彰編『続・沖縄戦を知る事典』、林の著作（『沖縄戦と民衆』『沖縄戦 強制された「集団自決』』『沖縄戦が問うもの』）から要約叙述している際には典拠を省略した場合もあるのでご容赦いただきたい。

なお沖縄諸島の中心となる島は一般には沖縄本島と呼ばれることが多い。ただ「本島」という言い方は

「離島」に対する差別だという考え方もある。自然科学の観点からは「本島」という言い方ではなく、沖縄島と言うようである。本書ではそうした議論も念頭に置いたうえで、沖縄諸島のなかで政治行政経済その他において中心となる島として、また沖縄戦において主要な戦場になったことも含めて沖縄本島と記述する。また特に島の名前を記していない場合は沖縄本島での出来事の叙述である。